

書の世界を豊かにする 山梨伝統の和紙と硯

近年、書道を楽しむ人が増えていきます。書道に欠かせないのが道具。山梨には、県が認定した郷土伝統工芸品12品目の中に「西嶋手漉和紙」と「甲州雨畑硯」があり、長年にわたり書道界で愛用されてきました。その産地を書道家の武田双雲さんが訪ねました。



Souun TAKEKI

書道家

武田双雲さん

Profile

1975年熊本市生まれ。3歳から母である書家、武田双葉(そうよう)に書を習う。東京理科大学理工学部卒業後、約3年の会社勤めを経て、2001年1月より書道家として活動を始める。書道教室を運営する傍ら、国内外で数多くのパフォーマンス書道を披露。NHK大河ドラマ「天地人」をはじめドラマ・映画などの題字や企業・商品のロゴなども多数手がける。近著に「はじめてのお習字」「人生を変える「書」」など。6月9日を「世界感謝の日」にする活動にも取り組んでいる。

武田双雲 公式サイト <http://www.souun.net>



山梨県に対する印象は？

僕の名字は「武田」で、母の旧姓が「甲斐」なんです。「山梨」とは、きっと何か縁があるんじゃないか？」と自分では思っているんです(笑)。山梨は県名に果物の「梨」という字があって、実際に有名なフルーツ王国。加えて、山も、川も、空も清らかでとても美しい。僕の中では「イメージが良い県ランキング」の1、2位を争うくらい大好きです。

西嶋手漉和紙との出会いは？

7年ほど前に、山梨の伝統工芸を紹介するNHKのテレビ番組に出演した際に初めて知りました。繊細な墨のじみ具合が気に入って、それから、西嶋の和紙を使わせていただいています。



各世帯にお配りした冊子には完成作品「優」が掲載されています

甲州雨畑硯のことはご存じでしたか？

実は、洗練されたデザインのかっこよさに惹かれて、ずっと憧れていたのが雨畑硯です。今回、念願の産地を訪ねて作り手の方のお話を伺うことができ、強い感銘を受けました。

武田さんにとって、書道の魅力とは？

書道と聞くと、お手本を忠実に写すという「習字」の印象が強いと思いますが、実は基本を習得したその先には自由な表現を楽しめる、素晴らしい世界が待っています。クリエイティブで、芸術的で僕にとっては最高の自己表現の手段なんです。

2012年を迎え、山梨にエールをお願いします。

昨年は東日本大震災があり、山梨でも観光客が大幅に落ち込むなど打撃を受け、さらに、台風でも大きな被害が出た、大変な1年だったと聞きました。そこで、新たな年が少しでも良い年になってほしいとの気持ちを込めて、皆さんに「優」という一文字を贈ります。「優」って、「人」が「憂」いに寄り添っているように見える。本当に優しい人って、他人の悲しみに寄り添える人だと思えます。でも、他人に優しくするために自分自身がしっかりしていないと。だから、一人一人が幸せになって、人の憂いに寄り添えるようなゆとりを持ちたい。困難な状況で、思い通りにいかなくても、一歩ずつ前進していけば、必ず明るい将来への道が開けるはずですよ。



硯を彫る際は、ノミを指先でコントロールしながら、ノミの柄を肩で押して彫り進めます



地元で採れる良質の粘板岩と職人の技が融合した芸術的な硯

1690年、雨宮孫右衛門が早川の河原で黒一色の流石を拾い、硯を作ったのが始まりとされる。1784年、将軍一橋公に献上し、その名が広く知られるようになった。以来、多くの書道家に愛される逸品です。



雨宮さんの作った硯を見て、「このきめ細かさや微妙な曲線がたまらない」と話す双雲さん

富士川町

甲州雨畑硯

美しい墨色、柔らかなにじみを生み出す伝統の手漉き和紙

1571年、西島（現・西嶋）生まれの望月清兵衛が武田信玄の任により、現在の静岡県伊豆修善寺で和紙作りの修業を積み、その製法を持ち帰ったことから始まった。戦後全国に先駆けて開発・販売した西仙紙が普及。現在も手漉きの製法を守り続けている。



紙漉き60年のベテラン職人の技を見学。1日に3000~4000枚も漉きます

西嶋手漉和紙

身延町

西嶋手漉和紙は、三椀みつまたや稲わらなどを原料に、昔ながらの製法で一枚一枚、丁寧に手作業で生産されています。西嶋の和紙に出会って以来、愛用している双雲さんは「紙に個性がありますよね。にじみ具合が良いのと、筆への反発力が強いので、筆をどう動かすのか、和紙とせめぎ合うことで、創作意欲がかき立てら



大きなアイロンのような鉄板に1枚ずつ刷毛で伸ばし乾かします。高度な紙干しを軽々とこなす職人技に双雲さんもびっくり

れて面白い」と話します。この日、双雲さんが訪ねたのは、100年以上和紙作りをしている山十製紙。代表取締役の笠井伸二さんとは、NHKの番組で出会って以来の付き合いですが、工房を訪ねるのは今回が初めてです。紙漉き職人が、流れ出てくる原料液を簾すだまで巧みに一畳ほどの紙にし、次々と積み重ねていきます。

漉いた紙は、15~20センチの厚さに重ねたまま天日干しにします。この工程があるのは西嶋だけです。「三椀は繊維が短いので、天日で干して結び付きを強くします」と笠井さん。縮まった和紙を水に浸け、職人が一枚一枚分離し大きな鉄板の上に手際よく伸ばして乾かします。紙干し職人の技に「これはとんでもなく難しい。僕には絶対無理」と驚嘆する双雲さん。西嶋の和紙は、多くの工程や職人技無くしては成立しないと再認識し、「こういう和紙作りの現場を知って使うのと、知らないで使うのとでは、書の出来栄えが違ってくる」と感動しきりでした。



「双雲先生は、西嶋手漉和紙の個性を存分に引き出してくれる」と山十製紙の笠井さん。手前は天日干しされ、縮まった和紙

双雲さんが以前から欲しがっていた硯こそ、江戸時代から続く甲州雨畑硯の老舗「雨端硯本舗あめはたすずりほんぽ」の硯でした。工房を訪れ、13代目、雨宮弥太郎さんの作った硯を手にすると、「洗練されたデザインがとても美しい。まるで最高級のスポーツカーを見ているよう。シンプルな曲線に職人のこだわりを感じます」と絶賛。早速墨を磨ってみると、「硯の粒子がきめ細かいので感触がすごく滑らかで、めちゃくちゃ心地よい」と噂にたがわぬ品質の高さを実感しました。



300年以上続く老舗の風格を感じさせる雨端硯本舗

雨畑硯は、地元で採れる良質な粘板岩を原料に、職人の手作業によって、「ノミで彫る」「砥石で磨く」「漆を塗って仕上げる」という三つの工程を経て作られます。「硯は、雑念を取り払い、自分の内面と向き合う時間を創るための舞台装置」と考える雨宮さんは元々彫刻家として培ってきた感性を生かし、使い手の立場に立った究極の硯を追求しています。「硯作りは、大地そのものの原石と向き合い、頭で考えるのではなく、目指すイメージに向かって自然に体が動き、いつの間にか形ができ上がるのが理想です。そのためには、スポーツと同じように日々の鍛錬の積み重ねが欠かせません。原石と自分の思い、そして体が一つになった時、初めて良い硯ができる」と話す雨宮さん。これに対して双雲さんは「ビジョンを持ち、その時々状況に反射的に対応しながら理想の作品を創り上げようとする僕の姿勢と全く同じ」と応じました。それぞれの世界で新しいものを追い求める二人の間には共鳴する部分が多く、双雲さんはますます雨畑硯が放つ魅力に引き込まれていきました。

道の駅 富士川ふるさと芸芸館 (富士川クラフトパーク内)

峡南地域の伝統工芸(手漉き和紙・印刷)や陶芸、ガラス工芸が体験できます。芸術に親しみ、広大な公園と食事を楽しめる施設です。



身延町下山1578
TEL 0556-62-5424
開館時間 4月~9月: 9:00~17:30
10月~3月: 9:00~17:00
休館日 水曜日(水曜が祝日の場合は翌日)、
祝日の翌日、12/27~1/1

富士川ふるさと 検索

身延町なかとみ和紙の里

西嶋の和紙とそれを用いた小物などを展示販売しています。また、和紙の手漉き体験も楽しめます。



身延町西嶋345
TEL 0556-20-4556
開館時間 9:30~17:00
休館日 火曜日(火曜が祝日の場合は翌日)、
12/28~1/1

なかとみ和紙 検索